

# ウニス王のピラミッド・テキスト（3）

## —第72番～第96番—

吹田 浩\*

Pyramid Texts of Unis (3): Utterances 72-96

Hiroshi SUITA\*

### [Abstract]

The present paper is a translation with comments on the Utterances 72-96 of the Pyramid texts belonging to king Unis. The translations that scholars have carried out differ in a lot of sentences to some degree because of difficulties deriving from the immature orthography dating back to the 24 century B.C., and from the peculiar expressions as religious texts. The Pyramid Texts is the most important and basic materials that may allow us to figure out the religious thought in the Old Kingdom. Therefore, comparing and examining the published translations, I show some translation and comments in some probability to reconstruct a part of the religious thought.

### [要旨]

本稿は、ウニス王のピラミッド・テキストの第72番から第96番までを翻訳し、コメントをつけたものである。筆者は、古代エジプト古王国時代の壁画の修復に関連して、当時の宗教観を復元するためにピラミッド・テキストの翻訳を進めている。ピラミッド・テキストは、紀元前24世紀に遡る最古のテキストであることに加え、宗教文書であることからくる特有の難解さがあり、今日まで行われている翻訳にも研究者によって多くの箇所で大きな解釈の違いが見られる。一方で、このピラミッド・テキストが当時の宗教思想を知る上で極めて重要な基本的な資料であることは疑いがないことから、現在の段階で行われている翻訳を比較検討し、可能な限り、蓋然性の高い翻訳を行い、当時の宗教思想の一端の解明に努めるものである。

### 1 はじめに

本稿は、ウニス王のピラミッド・テキストの第72番から第96番までを翻訳し、コメントをつけたものである。筆者は、古代エジプト古王国時代の壁画の修復に関連して、当時の宗教観を復元するためにピラミッド・テキストの翻訳を進めており、本稿はその3本目になるものである。

ピラミッド・テキストは、世界で最古のまとまった宗教文書であり、古王国時代終わりごろの王とそ

---

\* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

のきわめて近い親族のみが墓に残している。ここで扱うウニス王のテキストはその中でも最も古いものであり、紀元前 24 世紀に遡る。ピラミッド・テキストは、最古であることに加え、宗教文書であることからくる特有の難解さがあり、今日まで行われている翻訳にも研究者によって多くの箇所で大きな解釈の違いが見られる。一方で、このピラミッド・テキストが当時の宗教思想を知る上で極めて重要な基本的な資料であることは疑いがない。そこで、現在の段階で行われている先学の翻訳を比較検討し、可能な限り、蓋然性の高い翻訳を行い、当時の宗教思想の一端の解明に努めたい。

本稿では、昨年に行った供物リストの一部をなす第 23 番から第 57 番に続き、第 72 番から第 96 番を翻訳し、コメントをつけた。これらの呪文は、ウニス王のピラミッドでは地下の埋葬室の北面に彫りこまれているものである。

昨年に翻訳した第 23 番から第 57 番では、水を注ぐ儀式から始まり、香を焚く儀式、口を清める儀式、口開きの儀式、食事を捧げる儀式となっていた。本稿で扱う範囲では、第 72 番から第 78 番では死者に 7 種類の神聖な香油を塗る儀式、第 79 番では目に化粧する儀式、第 81 番ではリネンを捧げる儀式、第 25 番と第 32 番は香を焚く儀式と水とナトロンを捧げる儀式、第 82 番から第 96 番までは供物台に必要な食糧を準備する儀式となっている。

ウニス王の供物リストは、バルタによれば 2 つの部分から成っている。供物の儀式 (リスト・タイプ A) にかかわる部分と、口開きの儀式にかかわる部分である。供物の儀式は、第 23 番から始まり、第 25 番のあと、第 32 番から第 57 番まで口開きの儀式が挿入されて、本稿で扱う第 72 番から再び供物の儀式に戻る。Winfried Barta, *Die altägyptische Opferliste von der Frühzeit bis zur griechisch-römischen Epoche* (Berlin, 1963), p. 61.

バルタによれば、供物の儀式はさらに 3 つの部分に分けられる。始まりの儀式 (die Eingangsriten)、食物を実際に捧げる儀式 (die eigentliche Speisung)、終わりの儀式 (die Schlußriten) である。始まりの儀式は、呪文の第 23 番と第 25 番から始まり、口開きの儀式 (第 32 番～第 57 番) が挿入されているが、第 75 番から再びはじまって第 86 番まで続く。第 87 番からは、食物を実際に捧げる儀式となる。ただし、第 108 番と第 109 番が新しい儀式を導入しており、始まりの儀式に含まれるとされる。*Ibid.*, p. 67 and p. 69. したがって、本稿で扱う第 72 番から第 96 番は、第 25 番と第 32 番から続く供物の儀式のなかで始まりの儀式と食物を実際に捧げる儀式の一部にあたることになる。

なお、本稿では今までの翻訳と同様に、当時のエジプト語が時制・法・相について不十分にしか表現しないなどの表記方法の特性から来る解釈の違いには必要がなければ触れていない。研究者は、個々で呪文の意図するところを想定し、あるいは、前後の文脈に応じて訳者の裁量によって訳している部分が大きいのが現実である。

## 2 翻訳とコメント

### 第 72 番

オシリス・ウニスよ。私は、君のために君の目をメジェト軟膏 (*mdt*) で満たした。4 回、唱えること。祝祭の香り。

この呪文は、通常の供物リストでは 3 番目に来るものである。ここで「満たした」と訳した部分は、*sdm.n.f* 形である。マーサーとピアノコフは、現在時制で訳しており、儀式に見られる特有の表現と考

えている。このような用法については、吹田浩、『中期エジプト語基礎文典（増補新装版）』（ブイツーソリューション、2009年）、79-80頁を参照。フォークナーとアレンは現在完了で訳している。キャリアエは、「汝の目が汝のために満たされた（ときはいつも）、それは油からである」と独自の訳をしている。彼が受動態でこのように訳した根拠は不明である。「メジェット軟膏」は、ハニヒによれば、特に儀式において使われるものである。「祝祭の香り」(*sti-hb*)は、ここで実際に捧げられる香油の名前であり、7つある神聖な油のひとつである。以下の呪文では、残る6つの油が捧げられることになる。

### 第73番

オシリス・ウニスよ。汝のために彼の顔にある発酵物を取れ。ヘケヌウ油。

フォークナーは、「彼の顔」における「彼」を「おそらく」(presumably)ホルスとしている。ピアンコフとキャリアエは、この点に触れてはいないが、フォークナーと基本的に同様の訳をしている。これらの呪文では親子の関係を軸に話が展開していることから、「彼」と考えられるのは父オシリスか息子ホルスである。「発酵物」は、呪文の第49番 (§ 37a)と第55番 (§ 39b)に出てきており、そこではオシリスから出てきたとされている。ここでの「彼」は、オシリスと考えることができる。

マーサーは“*hnk im hr.f*”を「液体の供物が作られるもの」(that with which a liquid offering is made)と訳している。マーサーのコメントによれば、“*hnk*”を動詞としている。ここでの“*hnk*”を“*hnk*”（供物を捧げる）の異形と取り、さらに“*hnkt*”（ビール）との関連を思い浮かべているのかもしれない。

### 第74番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目、彼が荒廃を受けたものを取れ。セフェチ油。

「ホルスの目」とは、ホルスとセトの争いに由来する比喩である。ホルスがセトと争った際、その目を抜き取られて奪われるという惨禍があった。その後、ホルスはその目を取り返し、父オシリスに捧げた。このことから、「ホルスの目」は、儀式においては供物を意味するようになった。Cf. H. Bonnet, *Reallexikon der ägyptischen Religionsgeschichte* (Berlin, 1952), p. 314f.

「彼が荒廃をもたらしたものは、「ホルスの目」と同格で並んでいる。セトがホルスから目をもぎ取った事件を反映していると考えられることから、ここでの「彼」をホルスとしておきたい。この第74番から第76番までは、「ホルスの目」を使った同じ形式を持っており、おそらく「ホルスの目」をめぐる惨禍、目の奪還と回復、回復後の神々との接触という流れがあるのではないと思われる。

この文での“*sfkk*”は、極めて珍しい単語であり、研究者の見解が分かれている。さらに、この後に現れる「彼」ないし「それ」の解釈と合わせて、幾つかの訳が出されている。マーサーは、与格の“*n*”とあわせてこの語を「処罰する」としている。これは、ベルリン辞書 (*Wb.* IV, 118)にある訳を受け入れたものである。この訳語は、ハニヒにも引き継がれている。マーサーは、受動態で“on account of which he was punished”と訳している。ただ、この「処罰する」の訳は、この後、受け入れられているとは言い難い。ピアンコフは、根拠不明ながら「戦う」と解釈し、“on account of which he fought”と訳し、フォークナーは「彼」をホルスとして「害を被る」と解釈して“on account of which he suffered”と訳した。アレンは「荒廃をもたらす」として“on which he caused devastation”、キャリアエはこれをおそらく自動詞として“à cause duquel il se livrait à la devastation”と訳している。「荒廃」は、ホルスの目が

奪われた惨禍を指していると思われる。アレンとキャリエは、「彼」をホルスカセトとするかによって、また、訳語の上で能動的とするか受動的とするかに分かれていることになる。いずれの訳も、ホルスの目が奪われるという事件に関連して訳しているが、現状ではそれ以上の積極的な根拠はないように思われる。ただ、後続の第75番の呪文も、「ホルスの目」に続く文があり、「彼」が現れている。

なお、「セフェチ油」は松の油である。

#### 第75番

オシリス・ウニスよ。ホルスの目、彼が結合したものを取れ。ネシュネム油。

ここでの“*šnm*”は、通常“*hnm*”と書かれる単語の古期エジプト語での書き方である。ここでは、この単語を最もシンプルな訳である「結合する」で訳した。前の呪文のコメントで述べたように、「ホルスの目」をめぐる話の流れのなかで、ホルスが目をセトから奪還して、再び目を眼窩に入れたという流れがあるように思われる。先行研究においても、避けがたい文法上の解釈の違いは別にして、同様の訳を行っている。ただし、フォークナーのみは“*which he has protected*”と訳しており、ニュアンスを異にしている。「守る」という訳はセトに対して目を守るという意味で可能であるが、ここではやはり目の奪還後の再結合と解釈する方が望ましいと考える。「ネシュネム油」(*nšnm*)も古い読み方であり、一般にネクネム油(*nhnm*)と呼ばれるものである。

#### 第76番

オシリス・ウニスよ。ホルスの目、彼が神々をそれによって連れてきたものを取れ。ツアウト油。

ここでは、文脈が曖昧であるが、「ホルスの目」が無事にホルスの眼窩に戻った後、神々との交渉が行われたことを述べていると考えたい。

#### 第77番

膏よ。膏よ。汝はいずこにあるか。ホルスの額にある者よ。汝はいずこにあるか。汝はホルス(の額)にある。私が汝を置くのは、このウニスの額にである。汝が彼にとって汝のもとの快適になるために。汝が彼を汝のもとのアクの力で満たされるために。彼がその肉体に力を持つように汝がするために。汝が彼の恐怖をすべてのアクたち、汝の方を見る者たち、そして彼の名前を聞くあらゆる者の目に置くために。杉の最上級膏油。

膏(*mrht*)に呼びかける呪文である。「汝はホルス(の額)にある」での「の額」の部分は、文脈に加えて、ペピ2世の並行するテキストから復元される。また、「すべてのアクたち」では、「汝の」(*.k*)とあるが、これも並行するテキストから「すべて」(*nb*)と取るべきである。

この呪文の大きな問題は、“*dd.(i) tm (m) ḥst W pn*” (§ 52b)において、接尾代名詞“*.i*”(私)を補うかどうかである。膏を対象に呼びかける、このような儀式的呪文で順当に発言者と考えられるのは、儀式的遂行者である息子、すなわち、ホルス神が考えられる。膏を指して「ホルスの額にある者」と呼ぶ点が気になるが、これはこの膏に対して定型化された表現としておきたい。息子であるホルスが、父親の額に膏をおく儀式であり、これによってウニス王は力強く復活するのであろう。

ただ、研究者の解釈は分かれており、マーサーは主語を補わず命令、ピアンコフは *dd.t* として受動態、フォークナーは主語を補って未来時制（未完了）、アレンはフォークナーと同じく未来時制、キャリエは主語を補って強調形で訳している。筆者は、強調形で単純な訳を行った。なお、キャリエはこれに先立つ箇所を“(Comme) toi qui étais au <front> de Horus” とするが、このような訳は文法上難しい。

また、この呪文では、研究者の間で解釈が大きく変化した箇所がある。マーサーは、“*tn i.wn.t*” の部分を “arise, open thou” と訳していた。その後、ピアンコフは “*tn i.wn(i).t*” と読み、“arise, hurry!” と訳している。フォークナーが指摘するように、マーサーの解釈は文脈に合わないように思われる。フォークナーの前年に出版したピアンコフの解釈も、その後、受け継がれなかった。フォークナーの “where are you?” という解釈は、アレンにも “where should you be?” として引き継がれ、キャリエにも “où étais-tu?” として受け入れられている。「汝はいずこにあるか」に対して “*tn i.wn.tn*” のような表記がなされた理由については、フォークナーが説明を行っているように、想定される表現での類音の繰り返しを避けたか、古い用法の生き残りと考えざるを得ない。

#### 第78番

オシリス・ユニスよ。私は汝にホルスの目、彼が汝の額へと奪ったものを持ってきた。リビアの最上級膏油。

この呪文においても、膏は額に置かれて、あるいは、塗られている。「彼」は、「ホルスの目」をめぐる背景から、ホルスを指すと考える。ただし、「へ」(*n*) は、「から」とも訳すことが可能であり、マーサーはそのように訳している。この場合、「彼」はセトとなる。ピアンコフは、“the Eye of Horus which he takes, which is on thy brow” としている。ホルスの目は女性名詞であるので、この訳は難しい。この第78番の呪文で、膏にかかわる呪文は最後となる。なお、主語の「私」を補ったが、キャリエのみは命令で訳している。

#### 第79番

4回、唱えること。オシリス・ユニスよ。私は、汝のために傷のないホルスの目を汝の顔に描いた。緑の化粧顔料と黒の化粧顔料。

この呪文は、亡くなった王の目に化粧をする呪文である。この呪文でも、“*sdm.(i)*” と読み、フォークナーと同じく主語として「私」を補った。ただし、ピアンコフ、アレン、キャリエは、受動態として訳しており、文脈の上でも意味をなす。命令（マーサー）は、文法上可能ではあるが、文脈に合わないように思われる。ここでは、緑と黒の2種類の顔料が1袋ずつ、つまり計2袋が捧げられている。“*w3dw*” と “*msdt*” の2つであり、これらの発音のあとに、2つの袋の決定詞 (V33) が付いている。これは紛らわしい書き方であって、マーサーとピアンコフは緑の顔料が2袋あると訳している。ここでは、緑と黒の顔料それぞれ1袋とするアレンやキャリエの解釈が正しいであろう。ちなみに、ペピ2世のテキストでは、第79番と第80番のタイトルとして「彼の顔に捧げよ」という儀式での指示が書かれている。

#### 第81番

汝 [女性] が平安に目覚めるように！タイト女神が平安に目覚めるように！タイトが平安に目覚め

るように！デブのホルスの目が平安にあるように！ネト冠の館の中にあるホルスの目が平安にあるように！

作業者たち〔女性〕を受け入れる者〔女性〕よ。御輿を飾る者〔女性〕よ。汝が2つの国をこのウニスに腰をかかめさせるように！彼らがホルスに腰をかかめるのと同じように。汝が2つの国がウニスを畏れるようにさせるように！彼らがセトを畏れるのと同じように。汝が神性状態にあるウニスの前に座るように！汝がアクたちの先頭で彼の道を開くように！彼がアクたちの先頭で、西方者たちの先頭にいるアヌビスとして立つために。オシリスの所へ前へ、前へ。布、2巻。

第80番の呪文は、ペピ2世のテキストにのみあり、ウニス王のテキストにはない。この第81番の呪文は、死者に布地を捧げるものである。この場合の布地は、ミイラを巻く布を指していると考えられる。また呪文の内容から、死者が立ち上がり、復活を始める準備に入っているように思われる。

この呪文では、呼びかけられている対象は「汝」をはじめすべて女性形をしている。タイト女神は、布を織ることに結びついた女神である。タイトは、何らかの形でタイト女神にかかわっている名前である。ホルスの目は、捧げものを表し、ここでは布地を意味するが、品詞としては女性形である。初めに呼びかけとして、布地にかかわるタイト女神、その女神に密接にかかわる女神ないし関係者、そして布地を指すと思われる供物がまとめて一者として呼びかけられており、その彼女が死者に布を与えて、死者を復活させていることになる。

呪文が意味するところに大きな問題はないが、細かな点ではあいまいな点が多く、研究者の訳に差異が見られる。タイトは、ハニヒはそのまま女神の名前としている。あるいは、下エジプトにあるタイトという名前の町に由来すると取り、そのニスバ形（女性）として「タイト町の者」(*Ttitit*)、つまり、タイト女神を指していると解釈することも可能である。いずれにせよ、タイト女神を指していることは変わらない。このような町のニスバ形とする解釈は、マーサーとアレンが行っている。タイトという町は、ハニヒによれば下エジプトにあった。デブの町は、プトとも呼ばれ、今日のテル・エル・ファライーンにあたり、やはり下エジプトにあった。ネト冠は、下エジプト王の冠であり、ネト冠の館は下エジプトにかかわっていることになる。

「作業者たち」(*i.iriwt*)は、布織りに関係した女性たちと取るのが妥当である。ここでは、フォークナー、キャリエと同じく分詞として訳した。すなわち、死者がこのような布の儀式にかかわる女性たちを受け入れたとした。ただし、マーサー、ピアンコフ、アレンのように関係形とし、彼女たちが死者を受け入れたとすることもでき、現時点では文法上でも文脈上でも決め難い。また、マーサーはそもそもこの単語を「～に属する」(*iri*)の名詞化された女性複数形と読み、タイト女神に属する女性たち、すなわち、布織りたち、と解釈している。キャリエが“les compagnes”とするのは、このような解釈をしているのかもしれない。アレンは、化粧した女性たち (*the made-up women*) として、タイト女神との結びつきを離れて訳している。

「御輿を飾る者〔女性〕」(*ššrt wr*)においても、“*r*”のみで御輿と取り、“*wr-<sup>r</sup>*”で「御輿の大いなる者」と訳す場合（フォークナー、アレン），“*wr*”で御輿と訳す場合（マーサー、キャリエ）がある。ハニヒは、“*wr*”で御輿として、この§56cの例をあげている。一方で、§811aでは、“*wr-hts*”と平行で現れており、これが“*r*”のみで御輿と訳す背景かもしれない。また、“*wr-<sup>r</sup>*”としてニスバで訳して「御輿に属する者」と訳す場合（ピアンコフ）もある。この呪文が死者のミイラの布に関連しているとするなら、死者であるウニス王が御輿のなかにいる者であり、このウニス王を布で覆う者が触れられていると考え

たくなる。なお、ピアンコフは、「御輿の者が飾る者」と関係形で訳している。このように、分詞で訳す場合や関係形で訳す場合があるのは、この前の呪文と同じ事情である。筆者は、前半部分を、タイト女神を行為者にして、布にかかわる補助者たちとともに儀式を行っているとして解釈し、後半の御輿については、タイト女神を行為者としつつも、単純な訳を行った。

この呪文で気にかかるのが、「汝が神性状態にあるウニスの前に座るように！」(*hmsi.t hft W m ntr:f*)の一文である。この文は、アレンを除いて「汝がウニスの前に彼の神として座るように！」と訳しており、彼のみが、“May you sit opposite Unis in his divinity”（下線筆者）としている。呼びかけられている「汝」が女性であり、“*ntr*”が男性形である以上、文法上は男性であるウニス王を指していると考えアレンの解釈が望ましい。文脈の上でも、布を捧げられて復活しつつあるウニス王は、神の状態にあると考えることが可能である。

### 第25番

行く者がそのカーとともにいった。ホルスがそのカーとともにいった。オシリスがそのカーとともにいった。セトがそのカーとともにいった。トトがそのカーとともにいった。神は、そのカーとともにいった。オシリスがそのカーとともにいった。ケンティ・イルティがそのカーとともにいった。汝もまたそのカーとともにいった。

おお、ウニスよ。汝のカーの腕は汝の前にある。おお、ウニスよ。汝のカーの腕は汝の後ろにある。おお、ウニスよ。汝のカーの足は汝の前にある。おお、ウニスよ。汝のカーの足は汝の後ろにある。

オシリス・ウニスよ。私は、汝にホルスの目を与えた。汝の顔がそれによって備えられるために。4回、唱えること。ホルスの目の香りが汝に広がるであろう。香と炎。

ここから、再度、供物の呪文の第25番と第32番に戻ることになる。この第25番は、ウニス王のテキストでも3回使われており、ここでは2回目の用法である。コメントについてはすでに前に行っている。拙稿、「ウニス王のピラミッド・テキスト（2）」『セマウイ・メヌ』第2巻（2011年）、134-135頁。この呪文は、香を火に入れ、その香りが充満する儀式であり、ウニス王が神々にならんで生命にあふれることが描写されている。

### 第32番

汝のこの冷たい水は、オシリスよ、汝のこの冷たい水は、おお、ウニスよ、汝の息子のもとに出てきた。ホルスのもとに出てきた。私はやって来た。私が汝にホルスの目をもたすために。汝の心臓がそれによってすっきりとするために。私がそれを汝のサンダルの下に置くために。汝から出た液体を汝のために取れ。汝の心臓はそれによって弱ることはない。4回、唱えること。来い。声が汝のために出されてあれ。冷たい水と2粒。

この呪文も、すでに扱っている。「ウニス王のピラミッド・テキスト（2）」『セマウイ・メヌ』第2巻（2011）、135-136頁。この呪文は、ウニスのテキストでは4つのテキストがあり、ここでは3回目の用法である。4つのテキストでは、呪文の最後にある説明の項目が異なっている。「冷たい水と2粒」は、先行する同じ呪文の箇所から「冷たい水と2粒のナトロン」のことであろう。

この呪文は、ナトロン水で死者の口を清める儀式にかかわっている。すなわち、冷たい水を用いて、

死者オシリスが復活することになって、亡くなったウニス王を復活させようとするものである。

第 82 番

トト神が、それを持って自らを連れて来る者である。彼は、ホルスの目をもって出て行った。供物台、1。

この第 82 番から第 96 番まで、供物台とそれに必要な食糧を準備する呪文が続く。第 82 番は、マーサーが名詞文、つまり、分詞陳述として解釈している。これは、ピアンコフ、フォークナー、キャリエと受け入れられている。古期エジプト語の文法書においても、*in* に導かれない例として挙げられている。E. Edel, *Altägyptische Grammatik*, § 950. ここでは、トト神がホルスの目（それ）をもってやってくることを述べていると考えられる。ただし、アレンのみが、トト神への呼びかけとそれに続く命令で訳している。彼の注によれば、「トト神よ、それ（ホルスの目）を持つ者を連れて来い。彼（ホルスの目を持つ者）は彼のためにホルスの目とともにやってきた」のような訳になる。また、訳語から「やってきた」は、おそらく状態形で解釈していると思われる。このような解釈は、やや複雑であるように感じられる。なお、キャリエの第 2 文の訳は、「S'il est sorti, c'est portant (*litt. sous*) l'œil de Horus!» となり、強調形と解釈しているように思われる。

第 83 番

彼にホルスの目を与えよ。彼がそれで満足するために。おお、王の供物を持ってやって来い。

△「与える」は、マーサーとピアンコフは受動態で訳し、フォークナー、アレン、キャリエは命令で訳している。この字の表記が一般的な命令の形とは異なるが、文脈では仮定法を後ろにもつ命令と取るほうがエジプト的な表現に思われる。なお、最後の文が他の呪文で供物の名前が書かれている部分にあたる。

第 84 番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目、彼がそれで満足したものを取れ。王の供物。2回。

ウニスのテキストでは、「彼がそれで満足したもの」は *“hpt.n.fhr.s”* のように関係形に見える。フォークナー、アレン、キャリエも同様の解釈をしている。「彼がそれで満足したもの」とは、ホルスの目（供物）のことである。キャリエは「彼」をホルスとしているが、供物の受け手であるオシリスの可能性もある。

第 85 番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目を取れ。それで満足してあれ。広間の供物、2。

ペピ 2 世のテキストでは、呪文の第 85 番から第 92 番にたいして「大地に供物台を置くこと」というタイトルをもっている。

第 86 番

唱えること。汝のためにそれを汝のもとへ下げよ。座れ。沈黙せよ。王の「声の供物」。



「下げる（下がるようにさせる）」(*šhm*)と「座る」(*hmsi*)は、音が似ており、何らかの魔法的な効果を狙っているように思われる。フォークナーのみは、「沈黙する」の箇所を“now”と訳しており、おそらく不変化詞“*igr/gr*”と解釈している。またハニヒも、この箇所をこの不変化詞の項で挙げている。ウニス王のテキストでは、この第86番に「唱えること」が付いている。この呪文で、始まりの儀式が終了し、このあと食物を捧げる儀式へと移る。

#### 第87番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目を取れ。汝のために汝の口でそれと一体になれ。朝食。シェネス・パン、1。ジュイウ壺（ビール）、1。

「汝の口でそれと一体になれ」という言い回しは、ホルスの目、すなわち、朝食を取れ、ということの意味している。ジュイウ壺(*dwiw*)は、ビールを指している。アレンが“‘mouth-washing’ (meal)”と訳しているのは、単に直訳しているばかりではなく、呪文の中の「口」に関連つけているのであろう。

#### 第88番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目を取れ。彼がそれを踏みつけないようにせよ。ウト・パン、1。

悪事をなす「彼」は、フォークナーが指摘するように、セト神のことであろう。このウト・パン(*t-wt*)に関して、マーサーは疑問符付きながらもテツ・パン(*ttw-bread*)、ピアンコフもおそらく同じ理解でテツ・パン(*tetu-bread*)、フォークナーはツ・パン(*tw-loaf*)と読み、キャリエは“*t wt*”と転字してパン・ウト(*un pain-out*)と呼んでいる。ハニヒの辞書では、“*t-ttw*”の転字でテツ・パン(*Tetu-Brot*)としている。このパンの語の転字や読みは確立していないように思われる。

この語は、1931年のベルリン辞書(*Wb. V*, p. 210)では“*t.twj*”や“*t-wj*”の読みがなされたが、早々に放棄された。その後、ヘルマン・ユンカーが、“*t-wt*”と転字している。これは、大麦(*wt=it*)のパンという解釈からきている。Hermann Junker, *Giza V* (Wien, 1941), p. 94. セリム・ハッサンは、“*tw.t*”の読みをしている。彼は、“*t-wt*”以外にも幾つかの発音があったと推測されることから、“*tw.t*”と読んだように思われる。Selim Hassan, *Excavations at the Giza*, VI-II (Cairo, 1948), pp. 289-92. 本稿では、“*t-wt*”で、ウト・パンと読んでおく。Cf. W. Barta, *Die Altägyptische Opferliste*, p. 48, Nr. 20.

なお、アレンはここでも、「踏みつける」(*it*)の音をパンの音に関連付けて、“trampled bread”と訳している。

#### 第89番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目、彼が引き抜いたものを取れ。レテフ・パン、1。

ここでの「彼」はセト神のことであり、セトがホルスの目を引き抜いた事件を前提とした表現である。レテフ・パン(*t-rth*)は、ふり仮名がついていないが、他の供物リストからレテフと読んで間違いないであろう。ここで使われている𓆎の字は、「引き抜く」の箇所ではイテフ(*ith*)と読まれており、これがフォークナーがイテフ・パンとした理由であろう。ここで「引き抜く」と「レテフ・パ

ン」が関連づけられているのは疑いがない。アレンは、“pulled bread”と訳している。マーサーとピアンコフは、パンの名前を、“*ib-rth*”、“*tareteh*”としているが、パンの“*t*”を“*ib*”と読んだためではないかと想像する。キャリエは、パン・レテフに加えて、皿・ア(ʿ)を加えている。これは、丸いパンの決定詞とみなされる *o* を皿とみなし、コップ *o* を“*o*”と読んだものと思われる。なお、マーサーが「引き抜く」を「おじけづかせる」(intimidate)と訳したのは、その後、受け入れられなかった。


#### 第 90 番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目を取れ。セトがそれから食べたものは少ない。ジェセレト・ビールのカップ、1。

ここでは、「セトがそれから食べたものは少ない」と単純に訳した。ピアンコフ、アレン、キャリエの訳には、文脈や文法の上で無理があるように思われる。セトが食べた「それ」とは、ホルスの目、すなわち、オシリスへの供物のことであり、ここでは供物の被害が少なかったと言っているのであろう。ジェセレト・ビール(*dšrt*)は、そのままの音で訳した。フォークナーとアレンは“strong beer”と訳し、キャリエは水で割ったビールとしている。後者の訳の根拠は不明である。

#### 第 91 番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目、彼らが彼から奪ったものを取れ。ケンメス・ビール、1。

この呪文は、「奪った」と訳した  の部分は、“tentative” (ピアンコフ) や “conjectural” (フォークナー) というコメントが付くようになりかなり解釈が難しい。ハニヒは、“*ihhm*”の項で“wegnehmen”としており、この訳を使うことにした。「彼ら」は、セトとその一派という意味であろう。

#### 第 92 番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目を取れ。それを汝のために汝の顔へと上げよ。シェネス・パン1とヘント壺(ビール)1を上げること。

この呪文では、供物の名前の代わりに、儀式の指示が書かれている。「持ち上げる」の動詞の後に書かれているパンと器は、シェネス・パンとヘント壺である。ヘント壺は、ビールを入れるものであり、供物リストではビールと訳されることも多い。キャリエは、“*thnkt*”と転字して「パン・ビール(と)皿・ア」と訳している。「皿・ア」については、第89番の呪文と同じ理由である。「パン・ビール」については、このウニス王のテキストで“*hnkt*”を読む根拠は不明である。なお、フォークナーが主語を補う以外は、すべて命令法で訳している。

#### 第 93 番

汝の顔を上げよ。オシリスよ。汝の顔を上げよ。おお、そこなるウニスよ。そのアクが行った者よ。汝の顔を上げよ。そこなるウニスよ。ワシュである者よ。セペドである者よ。汝が汝から出てきたもの[女性]の方を見るために。それを讃えよ。(つまり、)そこで守られた者[女性]を。

汝を洗え。ウニスよ。汝が汝の口をホルスの目であけるために。汝が汝のカーにオシリスとして呼び

かけるために。彼が汝を死者のすべての怒りから守るために。ウニスよ。汝のためにホルスの目の中であるこの汝のパンを受け取れ。

「そのアクが行った者」(*sbi 3h.f*) は、ウニス王のアクの力が活動を始めたことを言っているのであろう。アクとは、知識によって得ることのできる宗教的な力のことであり、この力によって死者や神々は安寧に生活することができる。また、この力を持つ死者や神々はアクと呼ばれる。マスタバの供物リストには死者をアクにする儀式を行っているところが描かれている。葬祭儀式とは、死者をアクにすることである。ここでは、葬祭の儀式が成功し、死者ウニスのアクの力が活動したことを言っている。「ワシュ」と「セペド」も、古代エジプトでしばしば使われる力の概念である。

死者ウニス王から「出てきたもの」とは何であろうか。これに続く文は、“*hs sht im*”のように書かれているように見える。これは、決定詞もなく、単語の切れ目もあいまいな難解な箇所である。「出てきたもの」と関連しているのではないかと想像されるが、現状では意味のある訳は難しい。初めの語はマーサーとピアンコフは「讃える」、フォークナーとキャリエは「糞」、アレンは「打つ」と訳し、次の語は、マーサーとピアンコフは「加わる」、フォークナーとキャリエは受動態で「形成される」、アレンは受動態で「縄で捕えられる」としている。形成されるという訳は、フォークナーのコメントによれば、「布を織る」(*sht*)からきているが、その意味は怪しいとコメントしている。網で捕えるもやはり網で鳥を捕まえる(*sht*)からの推測であろう。筆者としては、“*hs sht im*”を前の文“*prt m im.k*”と平行な関係にあるものとして訳してみた。この場合、“*sht*”が“*prt*”に対応するが、動詞の“*sht*”に意味のある単語を見つけることができない。次の考えとして、“*ht*”を1単語として“*hwi*”ではないかと考えた。この場合、“*s(i)*”は従属代名詞となり、“*ht*”と同格の関係になる。「汝から出てきたもの」が「そこで守られた者」であってもよいであろう。“*hs(i) s(i) h(wi)t im*”とする解釈は決して積極的な根拠を持つものではない。ある程度確かな解釈を行うには、新しいテキストが出てくるまで待たなければならない。

「汝のカー」は、アレンの訳を見るとオシリスとしている。カーは、本来、生命力であり、通常、親から子へと流れていく。ここでは亡きウニス王が死者の神として死者をよみがえらせるオシリスに保護を求めているのであろう。そして、この儀式の遂行によって、ウニス王は生き返って顔を上げ、パンを受けとることになる。この呪文には、捧げられる供物の名前が書かれていない。

#### 第94番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目、汝がそれで生きているものを取れ。食糧、シェネス・パン、1。

この呪文では、めずらしい単語“*nšbsb*”が理解の障害になっている。ここでは、過去の関係形、つまり、“*nšbsbt.n.k hr.s*”としてホルスの目にかけて使われている。マーサーは“on which thou mayest live”、ピアンコフは“of which you shalt chew”、フォークナーは“with which you have refreshed(?)”、アレンは“on account of which you have burst forth”、キャリエは“à propos duquel tu es parti en courant”となっている。2000年代に入ってから新しいアレンとキャリエが同じような解釈を行っているが、ハニヒの辞書は単語の“*nšbsb*”の項で“leben”としており、マーサーの解釈に戻っている。ここまで研究者によって解釈が異なることになれば、いずれにも強い根拠はないのであろう。

ピアンコフは、第94番と第95番を1つの呪文として訳している。供物の名前をあげている箇所、

「食糧」(*šbw*)の部分が行を共有しているからである。なお、供物については、正確には、この第94番では決定詞のパンの部分が書かれていることになる。

#### 第95番

汝から出てきた発酵物を汝の身につけよ。4回。食糧、ジュイウ壺、1。

「発酵物」(*hnk*)は、呪文の第49番 (§37a)と第55番 (§39b)に出てきている。そこでは、オシリスから出てきた発酵物、を意味していた。第95番では、ウニス王自身から出てきた発酵物となっており、死者ウニス王自身が復活しつつあることが明確になっている。この第95番の呪文でも、第49番と第55番と同じく、この語に決定詞は付いていないが、ビール(*hnkt*)と関連していることは文脈から明らかである。この呪文では、遺体からの発酵物とビールの発酵物を関連づけているのであろう。なお、第93番に「汝から出てきたもの」が女性形で使われているが、ここの関連は不明である。

この呪文は、前の第94番の説明で述べたように、供物の名前を共有し、決定詞にビールの壺をつけている。ビールの壺は、第87番と同じく、ジュイウ壺と読んだ。キャリアエが“*hnkt*”と読んでいるのは、ペピ2世にテキストに拠ったのであろう。

#### 第96番

オシリス・ウニスよ。汝のためにホルスの目と完全な代用物を取れ。脛肉、1器。

「完全な代用物」は、フォークナーにしたがい、“*šw twt*”と読んだ。キャリアエも訳から同様の解釈をしているように思われる。これが、脛肉(*šwt*)と音に関連させているのは明らかである。マーサー、ピアンコフ、アレンは、脛肉やこれに関連した訳を行っている。この第96番は、供物台を用意する部分での最後のものであり、単純に脛肉と訳せない以上、供物の名前を単にあげているのではなく、供物(ホルスの目)のどのような内容にも対応できる汎用性のある表現を使っていると考えたい。この後は、死者の口を清める儀式が続いていくこととなる。

#### References:

[ピラミッド・テキスト]

Kurt Sethe, *Die altägyptische Pyramidentexte*, Vol. 1, Leipzig, 1908.

[ピラミッド・テキストの翻訳]

Samuel A. B. Mercer, *The Pyramid Texts in Translation and Commentary*, 4 Vols., New York, 1952.

Alexandre Piankoff, *The Pyramid of Unas*, Bollingen Series 40: Egyptian Religious Texts and Representations 5; Princeton, 1968.

Raymond O. Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, 2 Vols., Oxford, 1969.

James P. Allen, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Writings from the Ancient World 23; Leiden, 2005.

Claude Carrier, *Textes des pyramides de l'Égypte ancienne, Tome 1: Textes des pyramides d'Ounas de Têti*, Paris, 2009.

[辞書・文法書]

James P. Allen, *The Inflection of the Verv in the Pyramid Texts*, Malibu, 1984.

Elmar Edel, *Altägyptische Grammatik*, *Analecta Orientalia* 34/39; Roma, 1955-64.

Adolf Erman and Hermann Grapow, *Wörterbuch der aegyptischen Sprache*, 5 Vols., Leipzig, 1926-1931.

Rainer Hannig, *Ägyptisches Wörterbuch I: Altes Reich und Erste Zwischenzeit*, Mainz am Rhein, 2003.

[本稿に先行する翻訳とコメント]

吹田浩、「ウニス王のピラミッド・テキスト（1）－第226番～第243番」『関西大学文学論集』第59巻第2号（2009年）、73-88頁。

吹田浩、「ウニス王のピラミッド・テキスト（2）－第23番～第57番」『セマウイ・メヌ』第2巻（2010年）、133-142頁。

本稿は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成20年度～平成24年度）」による成果である。